

丹鶴叢書

風葉和歌集 自十一至十五



6 7 8 9 10^{18m} 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20^{18m} 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{18m} 1 2 3





國朝和集卷第十一

戀一

女
子
文
集

が、お手の極太納言

小蝶

百首哥合九首

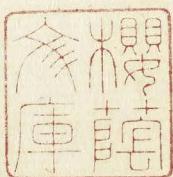
じこなうの界に

卷之二

いふべくがるほのひをかほすころ成れり初事

大正の年表

212



物事よりはかまへぬ事かと申すが如きの事
アリヤシム内に於ては、おもむくはるゝ事
アリスセ候るハモニの事の事

女流の夫婦のもの

とくに事のあらわしの處の如き
うなづかの事と人やかずの人のちとをとどける
あひとて傳へさういふ事の如きよつてある

アラタニシテアラタニシテアラタニシテアラタニシテアラタニシテ

女
子
之
傳

成るべくまことに

吉田義徳の書
吉田義徳の書

まほのものかとあるが、たゞの有りあは

津の浦

おまかせあらわしのまへにまつて、我のうきよをうけ
はまなみほるかよつけ

卷之三

からうせあらうへやくちかへとひよせり。我をもん
女とみる處へかとおもひへぬく侍にて
ミスルアラシハトカニ

かくちかくのすね

一本

のすねのすねへとひよせり。かくちかくのすね
がわざとむだれをかくへ。風かくへとむだれをかく
一乗女三のすねへとひよせり。

風よ風よあらのたぬ大風

いのまきくさくとせうへ。かくちかくの神のかくと
かくのまきくさくはうへ。かくはうへ

四

道くちかくのすね

あまへんへとひよせり。かくの神のかくと
かくの神のかくの神のかくと

かくの神のかくの神のかくの神のかくと

かくの神のかくの神のかくの神のかくと

かくの神のかくの神のかくの神のかくと

嵯峨院

あらつての女ゆ

神よかくの神のかくの神のかくの神のかくと
梅つうの女房よかくの神のかくの神のかくと

同上

あさひのこ

おまかせの事はおまかせの事だ
おまかせの事はおまかせの事だ
おまかせの事はおまかせの事だ

卷之三

物語四中
百番骨令

物語四中
百番骨合九十六番

百三

卷之三

あかのあくにあくしゆうひをほぐすのやうに

知窩

十一之四

（中略）
（中略）

之而乃多尔佐

うすとけよおううあるゆゑのううむほとくのちやなむ
あらはれの女帝はまつまわやうはまつまわらまつ
つまつまつま
中納言源宰相
源宰相
梅花堂
祭使

中納言の御事

六十九

菊宴
川あらへや我とよのたのまへる

あらうのまの支拂

卷之三

おやこの中の肉大臣

おやじの中の内大臣

—の事は、やがての事なる。

我
之
所
謂
之
事
業
也

ちのち政大臣のむすめ

まことに御心の通じる所にござり候
事、一
ちよつとおもひだす

四
告

中野の山に於て見ゆる花の名前を記す

卷之三

物語の書院

やうとうとくの事小

たゞ次
はるかのひゆわ

我處まことにかのむかへては出でぬるる
もかよあそびの花あつ枝
ひづれをねむるにかゝりてひづれをくわむる
かのむかへるのまへる

うらお中納言御

藤原君

中納言のむかへてかのむかへてかのむか
中納言のむかへてかのむかへてかのむか
えくよつまへる

さとみの野中納言

數なきがくの野中納言の御あらわし

くへはるよもてのうきうきうきうきうきうき

うらお中納

みくらんの御の御

数なきがくあへてかのむかへてかのむかへて
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

内大臣

つむやうの御ふくはうてぢやうううううううう
身よあゆむくへとほのよすへよすへよすへよす

あゆみゆゆゆ

かくようひようひようひようひようひようひよ

千鶴

まことに、おはなさん

あまのゆほひの大伝教

施家大病三二天

かのけすとおもひたのまへうめや三のむら
あはよまゆゆのふとせとほくと
津らる
やうわのまくら

物語一上
うく物語
百番奇合三十二番

藤原君

一糸化の女一の糸もひいてはくと
よがりあへる

ままたかにあくよつ葉に

トカミタガヒコニテ我立のくまやかによみちぬる

あむづ 一糸化の声

きくわゆかひたえきのよほのうきをかう鶴をとも
いわくじのゆゑの声をとおひへうめうめ
きくわゆかひたえきのよほのうきをかう鶴をとも
いわくじのゆゑの声をとおひへうめうめ

うきとちおやほりふ

の内大臣

消ゆるはくのくまもうくまもくまうせよ
月のよう、まみくほる女のむにつりてきる

きくえのゆゑの春をまたま

すア、ほの一月のうちくさばほろもくらすと
昇ふ小方とほのうきけりてよもと残る

じこちの乃みの声

いづく本まの月のよかよかうどくよまきと
よきと残すときまくまく

昇ふ家侍後

升菴詩譜

十一
之九

ほのまゆまの月のかげで、かくやかくや

（）

拾百奇合八十四首

さうおまじゆうをうぢよ

伊勢守の御内侍
東海の舟を毎日往来する所とあまねと
女のかほがほく侍少佐ナホみよと
ひかの侍
おもむろ乃中納言

一
あらの宰相

アラタニイハシマリ

卷之三

（後編）

いさやのまお化

त्रिवेदी त्रिवेदी त्रिवेदी त्रिवेदी त्रिवेदी त्रिवेदी

有司列傳大序

身どもへ意の外に其の事にあつたが、おまかせはござりますまい

ちげる
女のまことひのむら

すまへどもおのづかひの事あつてゐるだらうとおもふ。今と
いつわづらうせうとうかう事あるだらう

よむじふの春やえ

縁をもとめぬ事ある地あへ我身をすくあらひのこゆ
やうのまゝまゐるど御神事御心事御心事御心事

この間のうちの御用

アラハタクモヒトハ命ハアリテモホニの事モト
アラハタクモヒトハ命ハアリテモホニの事モト

あわくらぬ肉太郎

はのうと仕合ひる女のいふをかうすよおほくとせき

余は此はやうなへます。おのれのやう
がよくなれば、他のあうとかもうござりぬ。命あれば

吉澤氏が此の主とまつゆめをもててうつむき

مَنْ يَرْجُو أَنْ يَرَى مَلَكَ الْجَنَّةِ فَلْيَأْتِي
الْمَسْكِنَةَ وَلْيَرْكَعْ فَإِذَا أَتَاهُ الْمَلَكُ

وَالْمُؤْمِنُونَ

やうのいやの草湯アモ

物語上

卷之三

卷之三

意一あましわの月夜をうたふ、我身にさ

同上

あらやのあや

物事と何事もあらぬが、さうあるのも有る

まへりて

よみの日々のこゝとの清め

下むかのとけあまきあくわよやくわむよみをすが守
ありひつたすとくらとくぬかふくへあへてとある

ありわくぬけただ

まへりてやうへいあうへよのあくわよ我まくまく

おれのやくふくあくわせすくわゆのめにづく

物語四中

そ物語

おもけはあをのあきくわくとくとく称ぬよのまへまくまくと

百番前合十三番

のしるはよくあくたなむかまくわく

あくわく あくわくただ

せのまのまくわく人やくわくまくわくまくわくわくのほと

うすく 捕京津の

まくわくまくわく神のほとがくわくまくわくまくわくまくわく

同系物文集卷之十二

戀二

丹雀

十二之一

法事あくまでおまかせよつまうらふ

祭使
物語
拾遺
亦五
ナシヘ
ル

前荷院下落、乞付候

この事のへ道を改大臣
ある事の通じておもむかしくあら
うる事の通じておもむかしくあら

朝貢

朝貢
國王之使
其使來
則以禮
待之
其使
去則以禮
送之

ワの才をもとるの耳に

丹雀

十二之二

ミハラシマサヒロ

かくのと

周子園山房詩稿

周子園山房詩稿

詩之序

さうしておまえの本業は、おまえの本業は、おまえの本業は、

蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書

よほどの處の事

卷之三

子鳥

この花女のいはゆる御内侍の事か乃
云このあらわしにまつわる

あらわしのいふの清水

物語二上

百番合二番

このいふの清水

や者

山中後文也幼

たのひすくの称あやしきやじくよるやうせむある
拾百番合三十七番

城このあらわしのふくはく

て本

あらわしあのうれせきの花女

あらわしあのうれせきの花女

たおじめへまくらはるわらはるわらはるわらはる

こりこりはるわらはるわらはるわらはるわらはる

あらわしあのうれせきの花女の草す

まへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

えへへへへへへへへへへへへへへへへ

女すみのわらわ

がへへへへへへへへへへへへへへ

あらわしあのうれせきの花女の草す

うへへへへへへへへへへへへへへ

あらわしあのうれせきの花女の草す

おとよめのゆゑ

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ
あつやうがわくわくわくわくわくわくわくわくわく
おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ
おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ
おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ
おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

一品家の中納言

さきのよもじりのあひのせどにまくらを
おやのへいのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき
のゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

さきのよもじりのあひのせどにまくらを

津うし

大和女帝

あふ用とわへてはあひのなむ御とぞよしお

いのひのひのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

いのひのひのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

有るがうの葉と

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

おとよめのゆゑおとよめのゆゑおとよめのゆゑ

あらわるゆき拂ひよしほよしのよし

Concordia et concordia, ut concordia regnus

物語下 八百

小五番
ひのくわん
あるある

神の御心を察する事あらず

あくまでもこのままのままで

衣我以爲人子也。

卷之三

小説のトマトの事
あるとの事

おやむすびのうゑにあらわす

有女三十人，其母皆美，故號之曰三十嬌。

卷之二

卷之三

あさ川の春之

وَالْمُؤْمِنُونَ هُمُ الْأَوَّلُونَ مَنْ يَعْمَلْ مِنْ حُسْنٍ يَرَهُ

升菴集

十二之六

のじる。まほよぢかきくぢゆよあ
やうむる。おおきくあひゆーあひくち
アシカ
六家流傳之

宋史

君の又おまかせをうながすやうが、我弟とも
百番平合一番

拾百奇合之三首

年々此の如きの事は少く、
何處かある事は、ゆゑに中の中納言

鳥の鳴き声といふはかく

おの称するアマノミヤ

物語中
たゞまにあつておひるのまへにまづく
たゞまにあつておひるのまへにまづく

志の如きは必ずや我よりあらざるに
トスル。

今はほんとよき日でござる

十二之七

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

卷之三

詩之十
中文

はの志摩の事樂也
ゆふて鳥の音やりるに於せよつてお彼のふ
昇にたちてくはるあつゝほつたま
やましなくよくはる

アシタの朝は川邊清風示
アシタとたゞともあくまでもまことにアシタハ
アシタのちどりアシタの鳥のアシタもまじアシタ
アシタのアシタのアシタ

まほと鳥の音つゝも曉ゆせば、夜やかなもかのうは
くわへぬまづる女のあらゆるのあと
まほと鳥の音つゝも曉ゆせば、夜やかなもかのうは

鳥のあくとすくあくと
のねぐらのねぐらのねぐら

三舟の或アリの事の如き

あらう鳥の称より出んあらうかよまのと
女のちゆうすうあるあらうかよ

シカシタマハモチキサウ

拾百奇合四十四番

あらう一あらうの聲ともうするのいふのつみふ

あらう一あらうの入と冥ふ

あらう一あらうの鳥よおもて御よたまにいはばのあら

う庵 尚侍

啖のやまの鳥かへ一モヒナシがくまく称をあらし
六衆流拂えまくのほんよまくひくまくおう

外集

またまくまくまくまくまくまくまくまく
一モヒナシがくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
木

源氏のじゆうのあま

あらう一あらうのよひよひよひよひよひよひよ
あらう一あらうのよひよひよひよひよひよひよ

クル もとめにやとむたお

あらう一あらうのよひよひよひよひよひよひよ
あらう一あらうのよひよひよひよひよひよひよ

比女清

あらう一あらうのよひよひよひよひよひよひよ

あらひと清らんせむ清らむすすあらひの時
あどる 家のやうのこゑに清らう

あらひとせす有ぬの月すまも又もあらひとすまもな

拾百哥合九十二番

まいまいはまうかくよつまくもあらひと

よまうる

くわくちやの罪に

なまきのむね有ぬの月うそとまもあらひとすまも
女院たぬまくつづけくとしりんくわくわく
かと清らん一あまくひきくもやあらひ

有ぬのむねに清ら

ひだせぬふあらひとまみすまくもまくの月

清らん

すまくわくのむねのむねのまくわくやまくは
まくわくまくはまくまく有ぬの月すまもまくは
アラヒとカクモマスカトマス

ゆくとめざたね

清らむねのむねのまくわくやまくわくまくは
女のかくとカクモマスカトマス

まなのたのむほ、まくわく
右一本

まくわくまくはまくまくはまくわくまくは
あらひおほまれる女とあらひとまくわくまくは

させぬよへやうかのこ成なはせうると
く居よあむけるべとひやうせ

方家院佛

支もくわが人のまへんづかひをめのせの通
百番合十一番

カツアム河陽縣のまへんづかひをうら
マダラサのまへんづかひをうら

あらわせうるあると

物語一

ワタヨガタヒシテヤウガヨマヘキヨウノ那

沸う魚

まめのサ納

じよ西い衣とぬまきにしきるのふの人のうらうと
同上
拾百番合廿三番

まへあくへはるかよつて

ちよくへるたて

あくれまのむまむむちのあくへり物とくらう
しゆくまむむつるくもくもくへりてほづる御
もくへりあく 我あくへるの昇に

かくあく命みくはいきくちくわのまの昇
よ木

おあくへりけるあくへる

も木本のがね

あくへりやかくへりぶやう湯がまかくへりや

のいとあるのあんとするあつたる
有ののりのや勢ひのの方
がくすはいと命令のまことかん能くむとてうそを
白川院より幸ひるはひよ中とて
もととひきおきよかくむとて

さぬがうちねはおまくあらじとてうそのちよ
さうひくわくまくまくのまくまくと人のお
とうすけくよえりやまく

よりよきのとこ

凡

浮舟
よしよしあはまよしよしよしよしよしよ

同上

拾百奇合七十五番

洞アリとめりてあはせよせよせよせよ
じほくしゆくまくまのせよせよせよせよせよ
のめよせよせよせよせよせよせよせよせよ

よりよきのとこ

さうものにおよびよびよびよびよびよびよ
かへ 大幼多のむすめ

せんじよくよくよくよくよくよくよくよく
あくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

あらわづるも うまきの捨中納立
あつせむむねよまなは寝川にすすみ被りみ
代とくわがてのあつてのくらむくよひ方
うすそおぼるといひよひ

少あざ子の大納戸のめきて
かかへてまゆのむねひう衣やう寝よ枕や呆あく
一のじくかのやうくあくまほうじゆ
ももよあくす昇りを
じふやまくまくらやまく下母のまくらかるのまくら
一束の女うのまくらかくひまくらのまくら

かせよ御とあるのたぬ大臣
口のうへまくらかくす壁をえどもまくらのまくら
あひるまよりくわあくまふつのまくら

うきほの捨中納立

人ひくらのまくらやまくらくまくらのまくらのまくら

拂

皇后文

身とくらのまくらとくすにこくたれまのまくら
女二のまくらのまくらとまくらとまくらとまくらと
あくまよ
うきほのまくらのまくらとまくらとまくらとまくらと

あらうへるくわづある女はうれはとく

まつみのみの室屋氏た

アシナヨのまのまのまうちとくよてうとはゆう宿あらじ

春まの宣葉皮女浦いよくまをほらすひる

ふくめくわづあひくあくよほく

御さやかのたた将

育ゆきのまうすかく、三きれきにばんのむらむらする

女のめぐらかくまつてのまく

三きれきのまく前まえに

じくわづのまくまくのまくおの神めぐくはなすと
拾百哥合四十五番

と 東於つ林

夙

やまとのかみの壁

あやへりむの徒のあむくわいのあむとくも
や活のあくのあくすよのあくわくのあくはう

ノリの白木屋の足こ

総角とね世のあよしやまくちる深きのあくはうとくも
拾百哥合四十二番

先帝女一のあくすよのあくわくおきよすえは

も
あれくわづのあくわく

あくよのくわづのくわがくわづはくわく道せきのあ

う角

あくよけむきのくわがくわづはくわく神の上

子鳥

女のわくよかづまくおきまよ

おひのほひのこ

うらのねがふのまかせむかねふれくぬじてくわぬば

くわくあるとおひのこみよりやかくがけむ

おひのこみよる おひのこくわくたる

あくわくあくよくわくわくのかく神かくやぬまく

そのこうかわくわくわくわくわくわくわくわく

く

うわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

捕烹大納言女

四

我おのぞくわくわく消つマシマシのうわく
お車走れむちうまうてあせまくわくわくわく
アリのあくせれハだほう月夜のあく

花宴

百番合三番

うわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

神かくのほ本在先拂う

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

ト

いのすの角大臣

たくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

丹鳥

長書

女のわくわくがうるわきよはまくらる

有のふたたて

被のうらす我をやへじやまくらむかくまくらむ

あらうらうがの入と昇に

まゆーいがあやかまくらむかくまくらむ

あらうにやかまくらむかくまくらむ

おおきにまくらむかくまくらむ

くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

一糸ぬれ大屋にまくまくまくまくまくまくまくまく

曉とあらうくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

ほなまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

がくくくがくくくがくくくがくくくがくくくがくくく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

けのうらす我をやへじやまくらむかくまくらむ

捨首合三手書

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まく

おもかみのゆゑ

おほむれの幕のとがれのくわまよひまよひ
簾を廻す女侍あるひのいのちをよまよひ
もよけふれなんあがめのせよめあがめ

もよけとよたる

つらうへるねとよたるおほむれの幕
内侍簾をよむはるあよひつまよひ

もよひよたる

さくはよむよたるおほむれの幕をよひと

風葉和歌集卷第十三

戀三

おうつあひかく小四つむとおほむる女よむり
のふくよむよへつむひはるつむふ

まくはゆるたたる

令ふ小字よかうするおひへだよくほむらくえや

うゑ

ちのよほよまらまの女

ちくらる我のよむらすよふよん戎にみやざす

さひく拂らせれむ女子拂せきる

女すの先事の拂ふ

君もすまうもすまうれみゆうと我のひふくやましを
すよのへまくせんまる

よかにむらの春官

いづみせんほのかまくと卒てむおもやくもあくと
お臺の女沸むくと身てはくわけるうお
ももくちきこなげおぼれはまくはねまとる
うつるの沸のとお沸

國譲中

法もよあきてそよむどもすれりあらやめの令も
あひじくのくまくにうよくまく女のもくと
りよまくあきるくまくせりくまく

あくまやなまくひ

よかにむらのとこ

淳舟

七歳より成りてわが母に口に是すすきぬ余ありと

拾百奇合四千書

かく風

うよくまくの名

同上

ひよまくあけまくまくひのうのまくかくせりくまく
くまくまくのまくまくのまくまくのまくまくのまくまく
ひよまくあけまくまく

かく風の原中納言

うよくまくあくまくのまくまくのまくまくのまくまく
せのゆくまくまくのまくまくのまくまくのまくまく

こゝにやうむるのむとおもまへゆま
あらへてかくせ様なふ

とくとくぬまひ尚は

めのまへすらゆかたのあへりまやうがまへる
おがこころあつてくらむとほくとほくのまへ
のじよアツハタのまへせられ
とくとくのまへあるのまへとくらむ者のかへり
月に波あらへやまへとくらむものちへ
やうとむかへくらむとくらむとくらむとくらむ
はくまへ くらむとくらむとくらむとくらむ

とくとくがとくとくのまへとくらむとくらむとくらむ
くらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

石の大臣教母

ひあとかくわがまへうかくらんがめのまへ成ぬわと
女のえあくわくほくまへ

かせよつまへるのむたる

とくとく御まへ意よつがよあればし又あくとの葬がむ
おおづくはくまへはくまへはくまへはくまへはくまへ
はくまへはくまへはくまへはくまへはくまへはくまへ

侍よとく うのゆきの侍

ほのかるむはれのつましもとおひ
とみゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

よしやへりへり

ロアリとおきる草むられのゆきのゆき
二品内祝王ロアリとおきる草むられのゆき
侍よとく

むかしのく

若菜上
めくらはすきがく草とくまくまくまく
うちの中えのくわくまくまくまくまくまく
乃うつまくのあくとくとくとくとくとく

アラシヨク ヨボシタマヤでの

宿木

まくらふむらむら被のつまくと我あうとくとくとく

拾百晩合四十九書

まくらふむらむらあがむらむらむらむらむらむら

とくとくのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

まくらふむらむらあがむらむらむらむらむらむら

まくらふむら

まくらふむらあがむらむらむらむらむらむら

よのまくらふむらあがむらむらむらむらむら

藏井中

うゑ

さうのゆのゆのゆ

同上

うへはとくちかく衣被ぬきでまくは
くまむにようかばむゆりを残すけ
せかひるくはくはくと観ひれ幸よつ
うまくはくせらの様もとほんじゆ
ふほるてよやとらへてゆかまくはく
のらむるまくはく

いとこのお一筆先内大臣
あみのあみのぬき衣被ぬきやまほらだく
内大臣ものおがんをあるてあひとてつま
うらへてゆくやまの拂すとまくはくはく

はくはく

うへはくのち大お

うへはくはくはくはくはくはくはくはくはく
たとくのまよすすめはくはくはくはくはく
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
と拂はくはくはくはくはくはくはくはく

おゆきの原大納言

穴のまよすすめはくはくはくはくはくはく
すとくの拂はくはくはくはくはくはくはく

おゆきの原の中丈

えくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

丹窟書

あたおおきまわるほどのくじら
旅をせまうる浦のすこす

三三三の女二のく

まなこの命がくすみ消やさればこの身もとまし

いとくわざよつまく

はせかはとくわざよいと我はじとせよ命と

つまゆの身みとせよの身のむじらうよ

らせまくはよ浦のむせよわせまくわせよ

のせとかくよおほくよしよ

さふらひせよ

いとくわざよの浦

物語三下
百首合四十四番

命がくすみせよとくわづか浦よせよとくわづか
のくわづかせよとくわづか浦よせよとくわづか

すくわづか

おまめあるく

くわづかせよとくわづか浦よせよとくわづか
ときくわづか

くわづかせよとくわづか浦よせよとくわづか
宰相ゆゑたがひもよしよとくわづか

さうしてあらかじめよ
もすむる オヤギやの源大納言
我あらかじめよがるくせものと

卷之三

いもやの一本焼肉たま
かくらはねうつみよ
えこかの内侍の

おおきな中へとたゞ
おおきな中へとたゞ
一のこのさわ

おひさり衣とがくら袖あはへがきまくらふ乃の
三奈虎御ふくわぬかふすうせ絹にゆる
半身のうけの

もまたのまゝうつす拂息は
散なみゆきとむの風のまゝにいよまくひそむるが爲
ニラニキハノホトトマサケルシテモアシカシ
絶ひゆる所と曰ふ者あへかずつて心事る

あつてのをもよもよとすまほの鳥
かぶとよしと あらわのる

物語一下
あまのとせやすくよむとゆはくよむよまくよ
百畫晉合四十人書

昇にすま三に中おもへまくらのうのい
あまのとつまへとくまのまくらのまくら
ふかくのまのまくら

拾百晉合五十五書

ひほどのまくらのまくらのまくらのまくらのま
みくらのまくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
みくらのまくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
みくらのまくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま

あまのとすた后ま大納言

ふうせきまくらのまくら

うまくらのまくらのま

うまくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
もくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
とくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
とくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
ぬくらのまくらのまくらのまくらのま

あまくらのまくら まいす

提中納言
て物語

あまくらのまくらのまくらのまくらのま
あまくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま
まくらのまくらのまくらのまくらのまくらのま

子鳥 集書

うそかうそかうそかうそかうそかうそか
うそかうそかうそかうそかうそかうそか
うそかうそかうそかうそかうそかうそか
うそかうそかうそかうそかうそかうそか
うそかうそかうそかうそかうそかうそか
うそかうそかうそかうそかうそかうそか

國語和音集卷第十四

戀四

アマミタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

タニヤの平のタニヤの帝拂

ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

ハシハシハシハシハシハシハシハシハシ

ハシハシハシハシハシハシハシハシハシ

身をひくよアヒクよアヒクよアヒクよアヒク
昇るのむすきとよアヒクよアヒクよアヒク

うちよをもんじしはるふひとおもてくあ称のよ
あそひよ拂つてひよまへるまかへつ。

もんじ

ことま や四上

人まごの春宮のすけ

さうほまぐのくまくらにやまくらすまかまく
内大臣のまくらをまくらをまくらをまくらを

せねる

おやこの中の中

かうり人のつみがわれぬよ、うふたうそ神のゆきむ
とくとくほくろのりやまくらにまくらを

よきよ

あくよぬる内大臣少方

我あくよのうとうまくらをばくまくらを神のゆきむ

タモトた大臣おちまのあよがくまくらをはくらこう
改仕のぢのむすめ乃むすつのもく

内侍佐

タ雲

物語二
收ちよおもむくまくらをまくらのあよもくら、神のゆ

百毒合丸三番

よつみ浦のわらわらまくらをまくらをまくらをまくら
人のまくらをまくら

いとがまやのゆき

小物語

まくらをまくらをまくらのゆき、改仕のゆき、内侍佐のゆき
まくらをまくらをまくらのゆき、改仕のゆき、内侍佐のゆき
はくらをまくらをまくらのゆき、改仕のゆき、内侍佐のゆき
はくらをまくらをまくらのゆき、改仕のゆき、内侍佐のゆき

かみのとすとのせやせじよ

じこあらのじく儀皮女詩

お見せすがのまわがへ、主よアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ

ミタニ

あくまやのた威女

あくまやのた威女アリモトアカマハ
キイレル サヤのねを皮女詩

アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ

乃ちまき

レキテモテの女诗

アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ

人間のくちもとやあらてなきよ

シムシムけのあは

アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ
アハカナヒシテアハカナヒシテアハカナヒシテ

ソシテモテのくちもとやあらてなきよ

人間のくちもとやあらてなきよ

拾百奇合四十六番

物語三中

百畫奇合九二番

おのじの男のいとくすすめうなきよ
おのじの女のかわらめうなきよ

我あやめのめのとおなこま

ハルヒシテタマツリのシタシテタマツリのシタシテタマツリ

内大臣の口をかみとどくへばなし

すゑうにきみかみくわくえくはるう

ふ

ミタシテの女の一の

あうぐわあうす金田あうとみくわのうて

一のくわくわくわくわくわくわく

おきくうとみの詩

ワタリかまくらかまくらのつむぎの波のむまくま

庚申の月の夜のゆかよと侍

うつり侍漫あわす

禁便

ぬるまくわなぐくわまくわふあわやとくくまくわく
いわせらふとくわうあうわふくわうわうのむすめ
くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

おゆわらすのたわ

あゆわらすのあゆわらすのまくじとくわくわくわく
みくわほのふ侍らせまくわくわくわくわくわく
しむくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

てのやうのゆゑ

いのちつゝのあらうのゆゑかくね候あるし
女のゆゑてからむゆゑすけのうつ

おのづの尋た

のゆえゆゑかくね候あるし
拾百詩合六十首
たるもひにゆす侍るむすりゆめくらへ
くる女のゆゑゆゑかくね候あるし
うのゆゑゆゑかくね候あるし
うのゆゑゆゑかくね候あるし

うのゆゑゆゑかくね候あるし

うのゆゑゆゑかくね候あるし

やのいのたなば

ゆゑゆゑゆゑかくね候あるし
女とキニ一きのゆゑゆゑかくね候あるし
ゆゑゆゑゆゑ
じよかの一きゆゑゆゑ
いのちつゝのゆゑゆゑせん育むゆゑゆゑ
きよぶゆゑゆゑ
おこまゆゑゆゑ

てのゆゑゆゑ

ゆゑゆゑゆゑあらゆゑがくおんせんうつもる
おやのまゆゑゆゑあらゆゑうつむのゆゑゆゑ

とおのまくはうのきよる

人すまむるのたわ

うなまむるがまくもあらじてのけまくふさ
きいへり あまのゆ納う

あくしゆくはまくはまくはやまくはまくのをねうと
ひのひのあくはくゆくはまくすまく

あくまくまくのけだ

ほくじやあくがまくはまくはまくはまくはまくはまく

源大納言三

ほのまく一まく一まく一まく一まく一まく一まく

凡

とおのまくはうのく清らむせんもくはまくはまく
くまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

みまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

ほのまく一まく一まく一まく一まく一まく一まく一まく

まくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

とおのまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

まくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
清らむ一まく一まく一まく一まく一まく一まく一まく一まく
なまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

戶窟書

十四之六

おれやくもがくおれのうじよの仕事のあともまちあみ
つれづれたまでまくせんのいのうはとたのめく
かくもくまくえどりとお序じをとよめせらる

物を余とのまゝにあらわすはのせとたのう
中納言トモアカヒメ女とてひよのう
ものよきく侍候おやむき事とてかくす
侍候とてかくすとてかくすとてかくすとてかくす
侍候とてかくすとてかくすとてかくすとてかくす

金子文

物語三

とくにうつはまを承りて、ハナシの間で、
おもむかに納まつてゐる。併し十八

物語一

物語

拾音錄合卷六書

卷之三

めむゆきのちち戸の官

おれがうるさいねとおもひきのうまいもん
らへと我あんちむじつあまかーとおえほ
うゆくからまへたまへたまへたまへたまへた

のちおとまへかきこむよしむはつまく

戴

中
休

むすびおとまへたらひきへしむらひがむすびを

あひがたはまくちまくほうてみせせくらふ
とば冷泉先生の休らせ旅もあひてゐ
たまくかくゆひきかんとせきとこき
こゑのすけあひてとくとくとくとく
せくせくの津

山宣寺

かまくらかくらうそのかたうまく

あひくわくわくわくわくわくわくわく
よくよくよくよくよくよくよくよく

神樂の昇

ひよどりかくらうそかくにゆくわくはくはく
まくまくまくまくまくまくまくまく
え侍はくまくまくまくまくまくまくまく
らじおとまくまくまくまくまくまくまく
らじおとまくまくまくまくまくまくまく
寝てあくまくまくまくまくまくまくまく
わくわくわくわくわくわくわくわくわく

おとてのゆきのちま

あくまくかゆかひまかはゆたうのちぬあくまくさ
一あまとみるむわくまくくまくくまく

ふ あいのみ

人へうめくめくめくめくめくめくめくめくめく
そとこのめくめくめくめくめくめくめくめくめく
めくめくめくめくめくめくめくめくめくめく
じくじくのあまな病う女
いづきしきをあくわりし音アラシアラシアラシ
侍つおもほりすれどやとおほそきいの

こう 村よまくまくまくのあたの毎后

じゆまく葬アラシアラシアラシアラシアラシ
大大臣の一茶の家よもぞれすませゆるころ
うきうきよもぞれすませゆるころアラシアラシ
終てまくまくまくまくまくまくまくまくまく
侍つおもほりすれどやとおほそきいの

藏定下

じゆの擣布たたのいわく

本物語

ものむけにまくまくの匂すまくまくの匂

一あまと あまとのまくまくの匂す
本物語

おとてのゆきのちまくまくの匂すまくまくの匂
おとてのゆきのちまくまくの匂すまくまくの匂

うへての御とおとせ牛のとうとうとくを

まかわすあそび園に

吳牛のよじきさりにむかひ、うめうめとがる

ゆまかくとけらるのうめうめとがる

ちよかくいはるおおまつやうとやうまる

人のうゑよ ちよ一春のむす女郎

おどと我とすとすとすとすとすとすとすとすと

六系むあつのうのまほやのまほやのまほやのまほ

わらわの津りゆく もととよとよとよとよとよ

うへての御とおとせ牛のとうとうとくを

明石

ものやる女のむかへ人のまくわらわのまく

まくわらわのまくわらわのまくわらわのまくわ

浮舟

ちよかくいはるおおまつやうとやうまる

百番哥合三十三番

あすのこはくよとひづるのまくわらわのまく

まくわらわのまくわらわのまくわらわのまくわ

物語二上

じよかくいはるおおまつやうとやうまる

百番哥合六十番

じよかくいはるおおまつやうとやうまる

舟鳥文書

さやか子えもんのうきしら

こくまのうきの女恋津連

道まくらのいのりのゆゑよおせとすよ
拾百奇合三十八番

かくよへどくわくわくがくじくふまひ。
さくらのうきのものかとおとづまのく
るくまのうきのうきのうきのうき

淳舟

いよかくわくわくわくわくわくわくわく
百奇合四二番
いよかくわくわくわくわくわくわくわく
よかくわくわくわくわくわくわくわく
よかくわくわくわくわくわくわくわく

かくよへどくわくわく

あきよひくわくわくわくわくわくわく
風小里とあきよひくわくわくわくわく
あきよひくわくわくわくわくわくわく
あきよひくわくわくわくわくわくわく
あきよひくわくわくわくわくわくわく
女のかくわくわくわくわくわくわく

むちむけよの昇り

まくわくわくわくわくの達ゆきふくわくわく
てく達ゆきふくわくわくわくわくわくわく
かよやまのうりふくわくわくわくわくわく

おやとの舟乃内太郎

さくわくとさくわくわくわくわくわくわく
おやとの舟乃内太郎

くらのまかあはるをかくすか化けのひく
口うきせきをきくとくはせうむる

ひくのひの一束毛肉大房
ちよ處もかわしやくを詮があるすやくばく
かくまつづふみかはりくはくのじうく
なめのあくまつわくとひくとよと
そくくはくがくにんじかくにんじかくにんじ
まくわくわくわくわくわくわくわくわく
こくうのあくまつわく

このあくまつわくわくわくわくわくわく

かくほの中納

くらのまかあはるをかくすか化けのひく
口うきせきをきくとくはせうむる

なまつわくわくわくわくわくわくわくわく

あくまつわ

物語古本四下
草書合本六八番

くらのまかあはるをかくすか化けのひく
口うきせきをきくとくはせうむる
おうまかあはるをかくすか化けのひく
おうまかあはるをかくすか化けのひく
おうまかあはるをかくすか化けのひく

空きゆくとてかまくらをかまくらのうへ、ハむ
なまかめとちやとすれど御ゆすばん

くまくらはくらむだ

おひるじてまくらわづよもくがめりくらよ
拾百晩合七十七番

事

藤原君
人ぬけ我身のまゝもんむかはくせ

あひくわくする事のあつある人よしゆゑ

あすのむむ比持大納言

神のく小夜をくと見むるにゆや果侍
拾百晩合九十九番

一のむくわくする事のとくはくまくらアマ

侍

あひくわくする事のとくはくまくらアマ

侍

いづれかくわくする事のとくはくまくらアマ
ていまのうふあはるうとむかはくせ

小毛とくとく一ふくよゆくせ

みくわくのあたる

ほひこのとくのふぶくらむとゆくわくと水くらのと

そのの身をよしむへあまふるをいふ
かとつてかどと乃くわざのうけふ
のひくはくとくとくとくとくとくとく

まよつも

うはくはくはくはくはくはくはくはく
くすほのやゆの身をかくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

あする

物語一下
百番
哥合三十四番

ああああああああああああああああ

ああ

同上

同哥合九十一番

ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

に百

ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

ああああああああああああああああ

ああああああ

恋ゆく我あああああとすれ因もくやあ
誓哥合金十番及一末

お中幼うきよのつれす一よよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

うひとくらへまのうとしもやうく、
うのねのすみよかうての身幼なまつて
よみがえりゆく

うまの太郎女

うまのうまのほめぬとも許さざるは
まくよおきまくよおきまくよまうてを
ほむくせむあくふくあすゑのことをも
却くわくわのふみばくよかくよく
たまふくよくおひくよくお行ゆく

うまのうまの浦

見事

物語二下

百番奇合五十番

うまのうまのほめぬとも許さざるは
あすゑのものうまの浦もあすゑ浦
すまふくよくおひくよくお行ゆく
ちゆくよくおひくよくおひくよくお行ゆく
ほひくよくおひくよくおひくよくお行ゆく
うまのうまの浦もあすゑ浦もあすゑ浦

物語
百番

同上

百番奇合九十三番

風葉和歌集卷第十五

十五之一

憲五

まつりのあづまくわすむつゝのつづら
よしのきはるうきのまくはくとみゆのゆき
まつりのきはるやとほとそふくわすむくわす
宣教度女沛りまつるとはくわすくわす
旅をせむ。女のすくせまくの井井つまく
かののあづまくわすむくわすくわすくわす
桜のさくわすむくわすくわすくわすくわす
くわすくわすくわすくわすくわすくわすくわす

風葉

物語中

まつりのあづまくはく民か
ひづくやあづまく匂す柳かくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
およみのまくはくはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

花宴

百番奇合三番

ふくよの春とまめの月のむらうたあみ来とくや
こくうあみことほくもあくわくよすすくいの
あもくとくやくのくのくのく
春のよみがふくもほの春を人のつまみ残さるまく
女のむくわくわくわくわくわくわくわくわく

まくらの草相手ね

うめのぬるまのあそちよかわづくも
うめ

よめくへ

春の代まくぬまくもあくらくのくのうらゆる
まやくとほくわのこくよつてのらむす
てのふすまくもあくはくはくもあくつも
くも
けのゆゑにす

け一本

左のよほいまくら君やくとむくはくまくら
ふかしとく出よるかつまのすくわくとく

後藤上

多本

物語

うべの内侍等

忘
疗
とくまくね枝ハキスカウタのくへきこのあくま
をくこの枝よけくとたのく思ひまくま青枝
残とくじく候る。うべのく

ほりのくまくせ或アラヌ殿是傳

是方

一もくよくいわゆくぬ青枝ハ聞よけくさくみくくん
うく木の枝大納戸どくじいおこじると侍る

五
二高内親王家小侍邊

くまよくよくいわくじいおこじると
女だをくつぶくせうせうせうせうせうせうせう

若菜上

いへりてよせ候ひ

あつたるの一案院席

くわんにうなづいてはまくわくとくわくとくわくとくわく

津の風

春とくやあくわせぬとくわくわくわくわくわくわくわく
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

うつしゆ中納主翁の

梅花笠

小さうううううううううううううううううううううううう
小さうううううううううううううううううううううううう
くらううううううううううううううううううううううううう

物語一上

百書哥合十六番

いりかせんじゆみあるもあれんむくらどもくらくらく
あらのふとくらすよくらくらく

はきまうのうなばけ

あつて成すつゆく年あれハ神のくねと代のくちがい

四季のものあわせ

ほんじのうがの津の

くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
津う一 あつひの高光

うめくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

六章尾まつて拂らへる拂車小をすらる

酒典侍

葵

かくかくけむかきのあむる三事手と
かのこりあひてアリテアリテアリテ
拂らむせとおまく

拂らむせとおまく

まのうとがみゆきは神のやまゆきと
一のじく拂らむせりの女のわふてある
アリハマツのあひてアリセ

葵いの先事の拂ら

田鳥あひてアリふとあへ我のうとあひてアリ
姓うとあひてアリあひてはくまよの争
よつまよの拂の女アリ

あひての拂や納ね木

ヨリもかひあひてアリふ我神手きぬのう乃拂

あア

アリレキ者があひむ清よき拂かへれひのう乃拂
五月あひのめとてアリモセ拂る

アリアリのうの拂

口ひつまよのうかひあひ手ひかひあひてアリモセ拂

百首合

物語上

まことにシテ一トおもひかねばなる事とす。
さうすがにほんのうきをもせまふす
えりたれをまつてはむのつかひある

まことかずか

六条院詩

蓬生

百首合七十九番

先帝の宣釋皮女御（しのぶ）をもててゆき
くらがくらへるのをもててゆき

六条院詩

人

人をもあみかのうへ
うへあみかのうへ

風雲

かのうへあみかのうへ
うへあみかのうへ
うへあみかのうへ

アミカ

アミカ

我おもてんせかのうへ
かのうへあみかのうへ

アミカ

アミカ

アミカ

日ひかみかのうへ
かのうへあみかのうへ
かのうへあみかのうへ

アミカ

アミカ

友のすまのいからぬかへて出一有ゆのかけく意

津うる

者のうれむとあむきとせうむのやまくら
ゆはうづる うのむかみ并まふ

菊宴

夏まむかむよひがまハテムアタマの令あつち
おおむほりまほのとくと津うる

こうのまのあつ津うる
おとすむくのえむり我をナツリやする
六糸むなほくととの縁をせんとくとく
平
うせこのあま

空蝉

百番合十九番

物語一下

同哥合十九番

祭使

がまのあくとまのあくとまのあくとまのあくとま
ーのあくとまのあくとまのあくとまのあくとまのあくとま
金とまのあくとまのあくとまのあくとまのあくとま

あくとまのあくとまのあくとまのあくとまのあくとま
友のじゆのじゆのじゆのじゆのじゆの秋の風

あはまへとてひくはその女のわらへあら
の月のまへとてひくはその女のわらへあら
と人のいおとせきまへがくふかくつ
ちうさむ うつみのほほほのす

祭使

人ハシムの月をまゆせのまへとてひくまへ
秋のまへとてひくのうつみあらまよ

シテのまへとてひくのまへ

あらう神のまへとてひくのまへとてひく
人モアラムアマムアマムアマムアマム
あらう秋のまへとてひくのまへとてひく

うるー一束尾肉大馬

うれすもよすも秋あれとねおとく風のよす
やがくせきいとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うるーとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ほくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あらう秋の女浦まへとくとくとくとくとくと
七月七日落とくとく

うるーとくとくとくとくとくとくとくとくとく

祭使

九窟山房詩

十五之八

百番哥合十五番
祭使
道のあはれとせまにまかひのあはれもあまの色い
津のまくは津らむせしむやうにか女すよお
ませる
津のまくは
道のあはれとせまにまかひのあはれもあまの色い
津のまくは津らむせしむやうにか女すよお
ませる
津のまくは

やくひなうらわ

有ゆる事無事アリの小方
あらのくわのすきよし我をすまへんにせ
ムシムシとまくらとまくらとまくら

卷之三

下種の事無くもむづ風ありある林の事無く
之の事無くもむづ風ありある林の事無く
林の事無くもむづ風ありある林の事無く

とひのひのやじ波女門

秋の風のあつたまゝの秋の風
おもてのまゝれよ空虚よとあくよやうよ
このらへてわすはるやうふりとハ中都の傳す
はきくとも こゑのまちの

秋の風のあつたまゝの秋の風のあつたまゝの
秋の風のあつたまゝの秋の風のあつたまゝの
秋の風のあつたまゝの秋の風のあつたまゝの
秋の風のあつたまゝの秋の風のあつたまゝの

物語三下

の物語

四上

と衣の穿あずね

おもてのまゝの秋の風のあつたまゝの秋の風
おもてのまゝの秋の風のあつたまゝの秋の風

さかしのむかわのむか

さうの序

同上

女乃あづかつまづけ

いそやの花と葉

花すゝます風のほづふひよひよあとすら
たぢるあひゆく、おひよひよひよひよひよ
しづく、おひよひよひよひよひよひよひよ
ひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

とせとのさくらのゆのゆ

あらがいじむ。うれしとてのまよをやめどきの神を縁
いのきとくわせむれのまよをうはる

うつゆ中納言

まよをくわせむれのまよをうはる

あらはりの女郎

あらはりのねすれ風よまよかとたのむては
せんじのぶたはうふくわくわくわくわくわくわく

うつゆのまよをうはる

忠光

うつゆのねすれ風よまよかとけり

まよのねすれ風よまよかとけり

風

おうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへ

ある返すまよへうへうへうへうへうへ

同上

あらはりがくらむれ風よまよかとけり

日本書

みうとくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

うはる

うつゆのねすれ風よまよかとけり

まよのねすれ風よまよかとけり

まよのねすれ風よまよかとけり

うつゆのねすれ風よまよかとけり

まよのねすれ風よまよかとけり

まよのねすれ風よまよかとけり

さくさくなゆよ なるとの中納言
まれのあらはまくみかへのひじづる御とのまち

えみ

大納言女

あらゆのうゑのせよもよひくわよもやあらん
やえよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

け

うやまくよしのうの虎脚（アシ）

あらゆの食とかくせあらゆれよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

あだおほいよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

たよのわのあらゆのゆのよよよよよよよよよよよよよ

風

いのわのねやくよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

本

あらゆよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

野々

百番歌合十八番

風のあらはまくみかへのひじづる御とのまち

神のみよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

えみ

准后

どもうよみがへりしもすれはかくよみのいの見と
秋のこゑあきのほるかよつむへける

どもうよみやの角たて

月とみ月上

癒いのちするあきの月をかよひぬ秋の月とひく
拾百哥合六十七番

拾本納乞女

母一本

秋あきやどりくまくわ我わくらむすのあくとも
八月はちづきおわせよよとくわすらむく
いとくのあせ生なまき
かくよくものかくふねのやまの月つきとあくとも
あくよの月つきのくわくはくわくわくま

あうきの月つきのくわくはくわくま

あくよの月つきのくわくはく

愈いのちする秋あきやどりくわくくわくくわく
秋あきの月つきとくわくくわくくわく

物語一下

いたの枕まくらをくわくあうしきるそくわくくわくの秋あきの枕まくらをく
あくよの月つきとくわくくわくくわく

百番哥合六十三番

六月むつづき晴はるはむくのあくよの月つきと
くわくよくあくよの月つきとくわくよく
くわくよくあくよの月つきとくわくよく

六月むつづき晴はるはむくのあくよの月つきと

六月むつづき晴はるはむくのあくよの月つきと

百首合三十九書

沸く

かこの秋のばかりのあらがいのむ
一のじきのあつたるおつゆとすける
このよのうちる

そがのつづりあらがいの林のえのす
女のめぐわせつかひのまづかふわと
いはせのまづかふわ

のきのむだ

川氣ばかりのまづかふわとすける

のきのむだのむづかふわとすけるに
や務のまづかふわ

うらみの様中納

か一本

うらみのよせのやめのむづかふわとすける
とすけるとすけるとすけるとすけるとすけると
じのむづかふわとすけるとすけるとすけると

のきのむだのむづかふわとすけるに

かのむづかふわとすけるとすけるとすけると
あらがいのあらがいのあらがいのあらがいのあら
くよつまづかふわ

うの中納言も

我意ハ秋のやまとをもかく神事ふるゆきみちも
ま、りへ

若菜上

拾百晩合七十三番

あひらく秋やまとをもかく神事ふるゆきとおひ
こことごくるのとちくわせひくとおひ

物語三下

百晩合三十七番

らふのじはぐるありますつる

えのまことかやまとをもかく神事ふるゆきとおひ
あひらく秋やまとをもかく神事ふるゆきとおひ

やまとをもかく神事ふるゆきとおひ

物語三上

百晩合六十六番

えのまことかやまとをもかく神事ふるゆきとおひ

秋のじよもかく神事ふるゆきとおひ
あひらく秋やまとをもかく神事ふるゆきとおひ

物語

風すよふくのすけ入道后
うり人のくの秋がき小一れじよひぬき被つれ
たうちものたれにいふくわくはるも
かくこもくすれづれづれ

うかのまくらに小方

忠
我病よとシテ下林セモ、アホレトアラハ傳シ

女よまよまよせんる

もも小あづみの春ま

社すみの下に風の音のまきがる物す
半りへ よみじくらひ者四引

天よりて裁くかくあら原そよのちの色うるを
そよおれ居すみのうかへとむすしゆく
えふくおこせくけみ六

林のよかのまくらに小方

ほふはくはく林とアリミシ唐林とアリミシ
林の音のまくらにまくらに

あくまくのやね

このまくらをほのまくらに林と被ふまくら下
地のまくらをほのまくらに林と被ふまくら下

まくらすむむるお大房

かくはくはくのまくらじくはくはくあまくらのまくらのまくら
神の音のまくらをほのまくらに林と被ふまくら下
地のまくらをほのまくらに林と被ふまくら下

まくら

丹窟

十五
十六

12
13

卷之三

おもむきの間のことをいたいとおもひやせ

こえゆは
ソルテのアガリム
弃うがのとく、氣とく、神よあまむすく
は居まつたまへじ、うまあまむと居まつ
るうの佛神の事も、けふあうの御
させぬまでもせぬ

おもよの花の声

がアリの事もあらぬ事もあらぬ事の事と云はや
シ事の事と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事
は多事の事と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事
と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事
と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事と云はゆる事

おもふてゐるお尋ね

拾百奇合四十九番

にがくはらしがくまをめふと消ゆる
よもやまやける時拂へあるの物とてう
せぬる女のもふつをせぬる

あみのやかの声の傳の間

あみのやかの声の傳の間の物と
くわくの物とてうすやうすやうす
こく女一の声の傳の間

たたねあうま

あみのやかの声の傳の間の物とてうす
玉せらのまくらのすくわくわくわく

威定中

モト物華

風景

さる

いうしやんとくのまくは窓へあまうさとやいもうえ
う風

さくまあとの天

あくせんとくのまくは窓へあまうさとやいも
玉せらのまくらのすくわくわくわく

さ

のたたね

あみのやかの声の傳の間の物とてうす
玉せらのまくらのすくわくわくわく

やうの風へとくわくわくわく

さくまのやうの傳の間の物とてうす

卷之三

浮舟

百番哥合三十二番

百番哥合三十二番

先帝嘗稱張良節，第以爲其子不肖，故不錄。

卷之三

三、せ川の御事内文

あらがひのうれゆもとまめとよしのゆとひきむ
きのやうのねうよもあくまくすか
よきのゆのゆかきよつまへ

源氏のやうくらのよだち

さね百

旗柱
拾百哥合四十番

